

フィクションとノンフィクションをつなげた本を刊行した意図

国立病院機構 呉医療センター・中国がんセンター
臨床研究部長，副院長
谷山清己

新しい医療の試みを一般人に紹介することを目的として、フィクションとノンフィクションを組み合わせた本を昨年3月に出版しました。本のタイトルは、「乳がん患者の心を救う新たな医療—病理外来とがん患者カウンセリング」（日本評論社）としました（図1）。当センター緩和ケア専従看護師中西貴子との共著です。

私は、患者と家族を対象として、病理診断とそれに関連する治療法を説明する「病理外来」を10年以上にわたって実践しています。「病理外来」には、重篤な疾病告知後に起きる心理的混乱状態から患者が立ち直る動きをサポートする効果があります。「病理外来」そのものは、私とその原型を提案して自ら開始したのですが、近年は、その活動に看護師によるカウンセリングを加えています。「病理外来」と看護師による「がん患者カウンセリング」を組み合わせた活動を「新しい医療」と位置づけ、広く一般に周知したいと考えています。しかし、現状においても一般人にあまり認知されていない病理医が行う活動であり、新しさや効果をわかってもらう前に、「病理医とは」とか「病理診断がどのように臨床現場で扱われているのか」をまず理解してもらう必要があります。これらの項目について言葉をただ重ねただけの説明では、一般人に理解してもらうことはなかなか困難です。そこで本書の前半部分は脚色を入れた医療小説にして、一般人に興味を持って読んでもらい、結果として「新しい活動」を理解してもらうことを目指しました。

なぜ病理診断は大切なのか、病理診断はどのように決定されているのか、また、がん告知はどのように患者や家族の負担となるのか、などをわかりやすく説明するために、小説では仮想の病理医（40歳）を登場させ、妻が乳がんを患った際に自らが行う病理診断時に感じる葛藤を題材としました。そしてそ

の葛藤を超えた先に「病理外来開設」が続きます。

「病理外来開設」につながる流れの中で、「病理外来」ががん患者の心理サポートに有用な様を表現しました。さらに小説の中では、志を持って新しい医療を進める姿の尊さも表現しました。

一方、後半部分は、実際のカウンセリング場面をノンフィクションとして紹介しています。上手なカウンセリング技術を用いれば、病理外来で患者が得た、治療や診断への“納得”が、さらに心の整理や医療への積極性となっていく様が良いわかります。前半部分のフィクションと後半部分のノンフィクションが同じ現場でおきているかのように書きましたので、読者は、すべてが現実起きたことのように思えるかもしれません。

本書発刊から約1年が経過しました。実際の病理外来時に、既に本書を読んできたと私に告げる患者もいますが、病理外来が済んだあとのカウンセリング時になってそのことを看護師に告げる患者もいます。それぞれが持つ本書に対する感想は、病態がそれぞれ異なっているのと同じように微妙に異なっているようです。しかし、受診したすべての患者と家族がこの「新しい医療」に対して賛同してくださいます。

本書の説明に、フィクション部の登場施設や人物は実在しないと明記しています。しかし、一部の読者は、小説に登場する主人公の病理医やカウンセリング担当看護師が実際に診療している私たちと勘違いしているようです。そのようなとき、そうであるともないとも言わず曖昧にしています。小説の中の登場人物が私たちよりかなり若い設定となっているのが多少なりとも心地よいからです。本稿を読む皆さんもぜひ手に取って読んでみてください。読書感想を聞かせてくだされば幸いです。

